

赤城山の“すその”で暮らそう！前橋移住を考えるフリーペーパー

SUSONO

vol.1
[創刊号]



あなたと前橋移住を考える
「susono」創刊です！

前橋に縁のあった
みなさんにとつて、
このまちで暮らす毎日が、
楽しくて、面白くて、幸せな
日々になりますように。

人生は、十人十色。
進学、就職、転職、結婚。
明るい理由、暗い理由、
楽しい理由、悲しい理由。
移住の理由も、十人十色。

住み慣れたまちから、
生まれ育ったまちから、
新しい土地へ移り住む。
人生は、十人十色。

前橋市移住コンシェルジュはあなたの夢を応援します。

移住コンシェルジュ
鈴木正知

<https://www.facebook.com/maebashijuu/>

前橋にある企業の仕事や様々な取り組みを紹介します。
あなたに合った「前橋での働き方」が見えてくるかも？!

ハロー！まえばしWORK
多様な業界で働くママ・パパを応援！
GNホールディングス株式会社

Let's Learn 上州弁

船津伝次平

ブルーベリー
食べりい。

解説
上野国原之郷（現在の前橋市富士見町原之郷）の名主を務めながら農業技術の改良に取り組み、西洋の手法を取り入れた「船津農法」を考案。近代の農業技術の発展に貢献した「明治の三老農」の一人。

「食べなさい」「召しあがれ」の意味で日常会話に用いられる。用例としては、優しいトーンで「よかつたら食べり～」、厳しいトーンで「早く食べ！」など。



協力 GNホールディングス株式会社 前橋市城東町一丁目6-8 まいにちほいくえん 前橋市総社町一丁目9-31

歩いて帰ろう

川の流れは、様々な記憶を運んでくる。イマの自分、カコの自分、ミライの自分。
いま、自分とすれ違った気がした。



Instagram
@susono_maebashi

取材メモ
「移住とは、人生そのもの」という言葉にたどり着いたのは、玲奈さん。取材が終わったあとのことでした。「子育ては広々とした自然があふれるところで」との思いや、前橋が「夫の故郷」であることが、彼女の移住のきっかけ。移住は、大なり小なり人生が動く瞬間なのだろう。であれば、観光PR視点だけではなく、もっと移住者側の感覚を大事にしたメディアづくりができると良さそうと思いつくり作を進めてきました。

「おいしい」と「絶妙なほどほどき」。こうした言葉が玲奈さんから何度も出てきたのが印象的でした。家の周りに豊かな自然環境があるながら、車を少し走らせれば買い物もできるという今の暮らし。彼女にはすごくフィットしているそう。

ほかに、移住コンシェルジュ・企業の先進事例・若者移住者などのリアルな声や情報を探してあります。本誌を通して、前橋移住に縁のある方々に前橋は暮らし心地のよいまちだと感じていただければ幸いです！（ライター・竹内躍人）



ユニーグ U-29ヒーブル

前橋八幡宮 神職 小泉 亘さん(28)

「前橋生まれの愛知県東海市育ちで、移住したのは2016年2月。前橋は母方の実家で、小さい頃によく遊びに来ていました。それがちょうど2年前、こちらの代表宮司が亡くなった時にお話を頂いて。社会人3年目で今後にについて色々と悩む時期でしたが、代々その土地で受け継がれてきたものを守りたいと思い、移住を決めました。普段の主な仕事は、ご祈祷や神社の管理などです。今後はあまり使われていなかった社務所などのスペースを整備して、神社は入りづらいというイメージを変えていきたいですね。前橋は一見寂しい街に見えるかもしれないけれども、中では新しい活動をしている若い人も沢山いて、踏み込んでみると面白い場所だなと思います」

めぶく○前橋市

SUSONO vol.1 [創刊号]

発行日：平成29年9月7日

発行：前橋市役所 政策部 未来の芽創造課

〒371-8601 群馬県前橋市大手町二丁目12-1 TEL 027-898-6513 FAX 027-224-3003

移住コンシェルジュ便り

□ニ

全国的に移住を推奨する仕掛けや情報が乱立してくると、「移住（田舎暮らし）ってなんか楽しそう！暮らしが楽になる？家族との時間も増えるかも？」といった漠然とした考えが次々浮かんてきて、「我が家も移住を考えようかな？」と思い立つご家族が多くいらっしゃいます。

そこまでは正解！そのイメージは決して間違っていないのですが……ちょっと待って！宣伝広告やPRは素敵でも、その先の受け皿がザルになってしまっている地域が少なくありません。ですから移住先を迷った時は、気になる地域に「しっかり準備、しっかり調査、しっかり連携、しっかり段取り」を、一緒にになって汗をかいてやってくれる“人”がどれだけいて、繋がれるか？この辺りをよく考えてみてください。

それに実は移住って、自分が思う理想的の場所にたどり着くだけじゃない。そこで暮らす人たちが暮らす中で、時間をかけて育てて来た文化そのものに触れ加わることでもあるんです。まずは、自分の理想から一步引いてでも、周囲の人たちと寄り添って地域を知り、文化を共有しようとする。そんな姿勢があるだけでも、後の暮らしが大きく変わってくるよう思います。

こんな風に、移住を支えてくれる人の縁を見つけて、地域へ入って行く覚悟も出来たら、あとは移住するだけ。自分を信じて、憧れの地に飛び込んでみましょう。もちろん、困った時は移住コンシェルジュに相談して下さいね。

鈴木正知 (すずき まさとも)
東京都町田市出身。上野動物園や葛西臨海水族園の飼育員、長野県戸隠市キャンプ場管理人インターブリタなどを経て、2006年に前橋市へ移住。市内23の行政区を集めて地域活動の情報共有をする「前橋地域づくり協議会」や「前橋の地域若者会議」を立ち上げて以来、前橋市の地域づくりに携わる。2015年より、前橋市の移住コンシェルジュに就任。



玲奈さんのおすすめ

政次郎のパン

前橋市六供町 1221-2



前橋に来て「パン飴え」を起こしたという玲奈さんが紹介してくださったのは、1999年創業、地元で親しまれ続ける「政次郎のパン」です。小さめの店内には、種類に合わせてライ麦の比率を考えた本格的なドイツパンや、箱島の湧き水で仕込んだ人気の食パンなど、子どもからコアなファンまでをも唸らせるパンが所狭しと並びます。オーナーの大島政次郎さんも根っからのパン好きで、常に全国の勉強会を飛び回り、新しい製法や多様なパンの食べ方を研究し続けているそうです。

森のhahako園

“みんなでみんなのことを育てる暮らし”を目指している、母子主体の“森の子育て広場”。せっかく群馬に来たので、自然の中で子育てがしたい」という思いから、玲奈さんが前橋移住後に立ち上げた。「おにぎりとお味噌汁の具になりそうなものを持ち寄って、同じ金の飯を食べる。ただ集まって話すだけ」というシンプルな集まりだ。主な活動場所は、粕川町中之沢のサンデンフォレスト。山の中の見晴らしの良い場所にあるため、自分たちの暮らすまちを見渡しながら、子供たちを自由に遊ばせることができる。ホームページやFacebookページでも情報発信中！



「みんなでみんなのことを育てる暮らし」を目指している、母子主体の“森の子育て広場”。せっかく群馬に来たので、自然の中で子育てがしたい」という思いから、玲奈さんが前橋移住後に立ち上げた。「おにぎりとお味噌汁の具になりそうなものを持ち寄って、同じ金の飯を食べる。ただ集まって話すだけ」というシンプルな集まりだ。主な活動場所は、粕川町中之沢のサンデンフォレスト。山の中の見晴らしの良い場所にあるため、自分たちの暮らすまちを見渡しながら、子供たちを自由に遊ばせができる。ホームページやFacebookページでも情報発信中！

「実際に暮らし始めてみて思ったのは、みんなの行動範囲が広いなあということ。都内に住んでいた頃は、友人との予定やお買い物を徒步圏内で済ませていました。しかし、このままでは30~40分の車移動が当たり前という感じ。自分にとっての当然の行動範囲というのを見いだしていくのが難しかった。

一方で、それゆえの楽しみもありましたよ。森のhahako園」という、子育て世代に向けた遊びの場を立ち上げたとき、粕川地区だけでなく、30分以上離れた市内外のエリアからも参加者が駆けつけてくれて

。コミュニティをつくる活動や、お義父さんから教わった伝統の技術や遊びをシェアする教室の立ち上げなど、玲奈さんは新しくまちでも楽しく生き生きと暮らしている。東京から前橋に生活を移したこと、家族の中でいろいろな変化があったそ。



末っ子の四男・和志郎くん(1)を終始そばで見守る玲奈さん。ご自宅周辺を散策した際に訪れた牛舎で、「動物に小さい頃から触れておくことは、子どもの感受性や健康面にとって良い影響があるという情報をテレビで目にした事があり、気になっていました！」と話しながら、和志郎くんと牛を触れあわせていた。



“おいしいとこどり生活”的すすめ



初めての取材先として訪ねたのは、前橋と茨城を結ぶ国道50号を東へ走り、途中、粕川地区へ向けて北上。「赤城山の裾野は富士山の次に広いらしい」なんていうほのぼのとした会話をしていたら、あっという間に玲奈さんの待つお宅に到着した。移動時間は、およそ30分。市街地と粕川地区が案外近いことに感心していると、「きやはははー」と子どもたちの無邪気な声があたりに響き渡った。

「移住してきた当初は、93歳の大おばあちゃんと一緒に丸一年住んでいました。その後、大おばあちゃんは亡くなってしまいましましたが、新しい世代の私たちがこの家を引き継がせてもらいました」

自宅の目の前は、畑と牛舎が並ぶのどかな風景。4人兄弟の末っ子・和志郎くんを抱っこする玲奈さんに、牛舎を案内してもらった。周囲には人工的な音はほとんどない、鳥の鳴き声や木々の揺れる音が心地よい。こうした静かな住環境を求めてやってきたのか、築10年から20年ほどの戸建て住宅も多く立ち並んでいた。

「こちらに引っ越してくる前は、東京の上野のあたりに住んでいました。まちの中だったからほんと園庭もないような幼稚園ばかりでした。たつたら、公園を歩いて遊びでいるほうが多いなと思っていました

よ(笑)。さすがに、最後の1、2年は幼稚園に行つた方がいいんじゃないの?」といくつかの園を回ってはみたものの、長男がとにかく嫌がつて。

そんなとき、前橋の「木の実幼稚園」という幼稚園が森を持っていて、園を一般開放しているという情報を親戚から聞きつけた

んです。それで、私の興味本意で訪れてみたところ、一緒に連れて行った長男が森の中へひとりで入っていった。その姿に私たち

は、ありあまる元気を振りまいていた。

阿部さん一家がこの地を選ぶまで

純に夫の実家というのも安心でした」

阿部家では、耕志郎くん(10)、結志郎くん(6)、杜志郎くん(4)、そして和志郎くん

(1)という4人の男の子が、粕川の自然の中すくすくと育っている。取材を進める間にも、子どもたちはあちこち走り回って

は、ありあまる元気を振りまいていた。

本当に絶妙だなと思つていて。夫と私は、いたくないでしょ?」なんて言われることが多いんです。ですが、私にとつては宝の山。

手に届く範囲に自然があるって、暮らしに必要なまちも近い。自然とまちのバランスが、本当に絶妙だなと思つていて。夫と私は、自転車にキャンプ道具を乗せて旅をしてしま

うくらい、もとからアウトドア好きなんですね。若い時は、山の中に住むのが夢でした。一方で現実は、都心に働きに出るために満員電車に乗る毎日。それを何十年も続けるのはイヤだよねと夫婦で話していて。東京

を出ることは、地元とはいはずっとと考えていました。仕事をとの兼ね合いなどもあったので、生まれ育った国立や、鎌倉、奥多摩へ何度も候補でしたが、やっぱり煙もやりたかったし、子どもが自由に外に出られるよな生活が良かつたんです。実際、東京で暮らしている時は、ドアを開けるとすぐさま車の往来の激しい道路というような環境でした。そういう考えているうちに、夫の実家であることが移住先として浮上してきました。実家ということで、事前に何回か行って土地の雰囲気をなんとなく感じておけたのも大きかったです

ここで、自ら作つているという梅ジュースに氷を入れて出してくれた玲奈さん。さらに、玲奈さんのお義父さんがスイカを持ってきててくれた。風通しのいい古民家とはいえ、厳しい真夏の暑さの中、冷えたジュースと真っ赤なスイカが体に染み渡った。(その後、口をつける前のおいしそうなジュースに、和志郎くんが自分が食べていただけを入れてしまつたのはここだけの話



前橋市保健センター内 子育て施設課

027-220-5706

市内にある7つの児童館
地域で暮らす親子の憩いの場